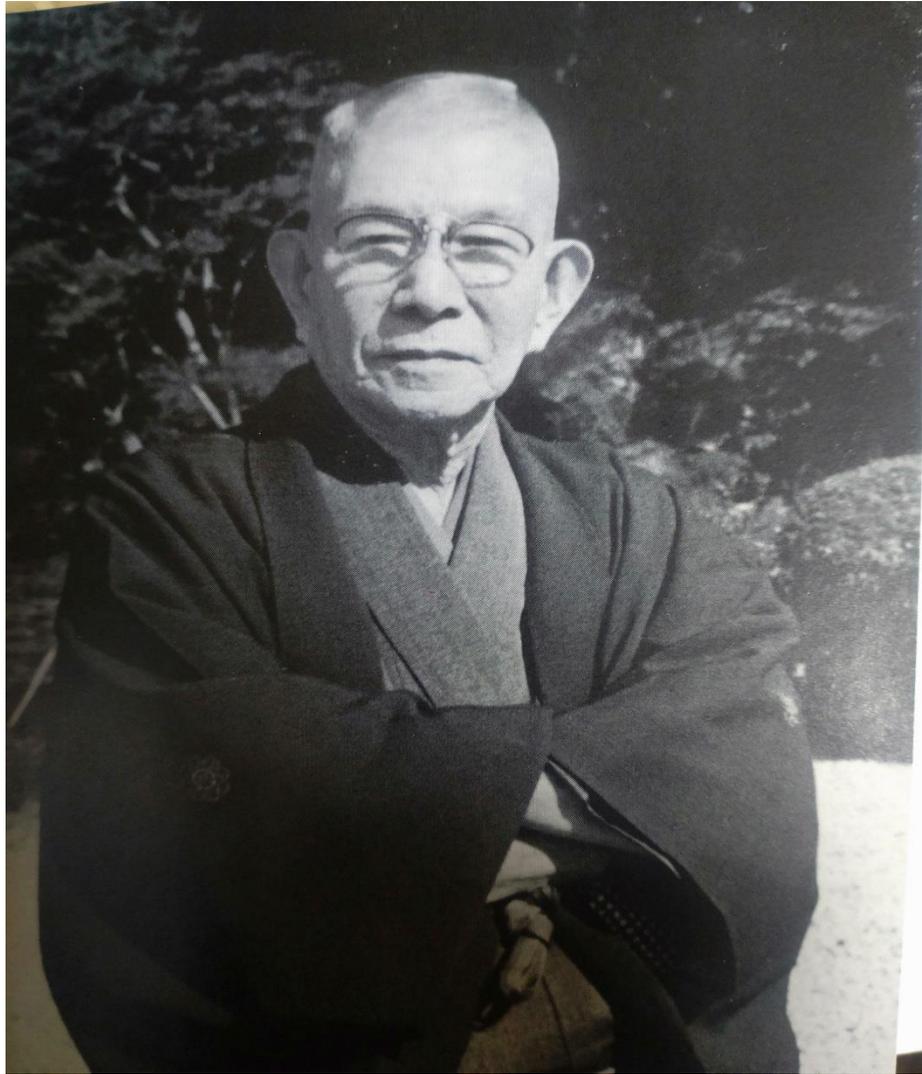


2021年12月23日

中村天風

志雲会

中村恭浩



はじめに

2021年、日本に一番明るい話題を提供してくれた人は、メジャーリーグの大谷翔平選手ではないでしょうか。その大谷選手が、愛読したという中村天風氏についてお伝えします。中村天風さんは、大佛次郎著作の人気作「鞍馬天狗」のモデルになった人物とも言われています。

また、作家 宇野千代さんは、「私はもう一行も書けないと思った時に知人から中村天風さんを紹介され、その話を聞いている内に再び作家活動が出来るようになりました」と述べてます。

多くの人々に影響を与えたその人生は、どのようなものであったのか、その一端だけでも伝えたいと思います。

次の写真は、12月15日に大阪駅近くの某大型書店で撮った物です。大谷翔平選手関係の書籍と中村天風氏の書籍が、二か所平積でコーナーが出来ていました。

祝! MVP
大谷翔平さん
「成功への情熱」愛読書の一冊として
梅盛和夫 紹介されました。

中村天風
折れない
心
言葉

成功への情熱
梅盛和夫
Crystal of force
Nakamura Tempu

一流の達成力
原田マコ「オープンウインドウ64」
大谷翔平
も高校時代に
大谷翔平選手が心証!

力の結晶
中村天風
「積極的に生きる」
悲運と病に打ち克つ
「強い心」を創る
秘蔵の感動講義
人生
中村天風
「心身統一法」
P11研究所
定価: 1,900円(税別)

ほんとうの心の力
中村天風
思い通りの人生を送るために
P11研究所
定価: 1,900円(税別)

中村天風
一日一話
財団法人天風会編

道へ
海へ
わたくし
佐々木亨
素顔の平
翔平

大谷翔平
86の
メッセージ
大谷翔平選手が語る
才能の秘訣
祝 MVP
受賞!

Sports Graphic
Number 1040
大谷翔平
「歴史を変えた男」の軌跡
大谷翔平
2014年結核

中村天風
悲運に
心悩まず
広岡達朗
中村天風 快樂に生きる
中村天風 快樂に生きる
中村天風 快樂に生きる
合田周平
合田周平
合田周平
人生は好転する
「天風」が私の野球人生を変えた!

壁を越えら
ないときに
教えてく
一流の
なる
そう考えれ
●スティーブ・ワグネルの「心」
●イチローの「強い心」
●他の選手が「強い心」
●「強心」の「心」

- 目次
- 人生年表
- 若き日々
- 恩師 頭山満との出会い
- 軍事探偵として
- 病に侵されて
- 真理を求めて海外へ
- カリアツパ師と出会い修行へ
- 影響を受けた人々
- その言葉

- 1876 (明治9)年7月30日 誕生 父 中村祐興 母 長子の三男
- 1889 (明治22)年9月 福岡県立修猷館入学
- 1892 (明治25)年3月 (殺傷事件) 修猷館退学
- 1892 (明治25)年3月または4月 頭山満に出会う
- 1902 (明治35)年 参謀本部諜報部員に採用
- 1902 (明治35)年12月5日 満蒙へ
- 1904 (明治37)年3月21日 死刑台午前8時40分脱出
- 1906 (明治39)年2月11日 軍事探偵解散
- 1906 (明治39)年3月頃 朝鮮総督府の高等通訳官
- 1906 (明治39)年6月 喀血
- 1908 (明治41)年3月 アメリカへ向け出国
- 1908 (明治41)年6月 アメリカ着 1年2ヶ月滞在

- 1908（明治41）年 コロンビア大学医学部入学 耳鼻科、基礎医学科
- 1909（明治42）年 コロンビア大学医学部卒業
- 1909（明治42）年8月 アメリカ発
- 1910（明治43）年5月 フランス発
- 1910（明治43）年6月5日 カリアッパ師との邂逅
- 1910（明治43）年6月6日 エジプトからインドへ出発
- 1910（明治43）年9月 インドゴーク村着
- 1912（明治45）年 頭山満と再会
- 1913（大正2）年7月 第二次辛亥革命参加
- 1913（大正2）年8月 日本へ帰国
- 1914（大正3）～1919（大正8）年 実業界へ転身
- 1918（大正7）年 福島県平炭坑ストライキ解決

1919（大正8）年6月8日 辻説法開始

1919（大正8）年 国民心身改良実行統一協会設立、すぐに「統一哲医学会」へ改名

1945（昭和20）年8月14日 皇居内玉音盤事件

（終戦前夜、戦争終結に反対する近衛兵が玉音盤を奪いに来るも、天風追い返す）

1968（昭和43）年12月1日 死去

本名 中村三郎 東京都豊島郡王子村（現 北区王子）で生まれる。

父の中村祐興は九州の旧柳川藩士で明治維新後は明治政府に仕官し、大蔵省紙幣寮（現国立印刷局）の初代抄紙局長を勤めていた。母は、江戸生まれの明朗快活な女性であった。当時、王子にあった大蔵省の紙幣寮の官舎に印刷技師として来日していた英国人夫妻に可愛いがられ、日常の中で英会話を身につけることができた。

少年時代の三郎は、手の付けられないような暴れ馬だった。例えば蛇を見つければ、上顎と下顎を両手でもって引き裂く。けんかをすれば相手の指をへし折る。耳は引きちぎる。母親はいつも後始末に走りまわっていた。

このような悪童ぶりに両親は手を焼き、福岡の知人宅に預けた。三郎は、明道館という道場で柔道に明け暮れた。激しい稽古を重ね自信をつけ、熊本の濟々鬘と他流試合を行った。結果は、三郎が大将を務める修猷館の圧勝。それを遺恨に思った相手は、三郎を一人呼び出し大勢で袋叩きにした。

翌日、三郎は、襲った相手の家をひとり訪ねて返礼していく。最後の家で相手が、家から包丁を持ち出し激しいもみあいになり、気が付くと包丁は、三郎の手にあり、相手の少年は、腹部を押さえた手を血に染めてうずくまっていた。医師が呼ばれたが、少年は出血多量で死んだ。しかし、警察で取り調べを受けた三郎は、すぐに無罪放免になった。なぜなら、一部始終を見ていた少年の母親が、あるがままを正直に話したからである。しかし、この事件の影響で修猷館を退学になった。

両親は、困惑した。母の兄・前田正名の紹介で頭山満率いる玄洋社に預けられた。頭山満、現代では知る人も少なくなったが、明治・大正・昭和にわたって泣く子も黙るといわれた右翼の巨頭である。当時の玄洋社には、血気盛んな若者が集まっていて、居心地のいい環境だったかもしれない。その中でも三郎は、「玄洋社の豹」とまで言われるようになった。

ある日、三郎は頭山に呼ばれた。部屋に行くと、陸軍参謀本部の河野金吉（当時陸軍中佐）が居て、頭山から、「けんかしても警察に行く必要がなく、人を殺しても刑務所へ入らないで済む仕事があるが、おぬし、やってみる気はあるか」と。

「おお、よか面魂じゃ、こやつを連れて行こ」、と河野中佐は即決した。三郎の度胸を見込んだのである。その時、三郎は、16歳だった。

三郎は、河野と共に中国大陸に渡った。現地では、重要地点と目される満州及び遼東半島方面の偵察・調査を、三郎は河野の手となり足となって精力的に行ったのである。

二人が日本に引き揚げて一年経つか経たないうちに、日清戦争が、勃発。三郎たちが、偵察・調査した遼東半島が主戦場となった。日本は、遼東・山東の両半島を制圧、約八ヶ月後に勝利を収めた。

明治三十年代半ば、日本は満州・朝鮮の支配をめぐり、南下政策を推し進めるロシアとの関係が悪化した。参謀本部は、極秘のうちに軍事探偵を募集した。すでに実地の体験を持つ三郎は、すぐに応募した。いの一で採用された。

探偵として訓練を受けた三郎は、明治三十六年には、ハルピン方面を担当する、スパイ活動に入った。旧満州(現中国東北部)生まれ、旧満州育ちの満州人さながらの風貌の橋爪という探偵とコンビを組んだ。鉄橋を

爆破し、夜間行軍する砲兵部隊に斬り込み、司令部に秘密文書を盗みに入るなど中村探偵の豪胆と俊敏さは、スパイ活動の中で存分に発揮された。

だがついに、黒竜江軍の騎兵隊に捕らえられ、死刑の宣告を受け、銃火一発、銃殺の瞬間、橋爪の投げた手榴弾の爆発により、助かるのである。この中村探偵のすさまじい程の活躍は、三郎の実弟、浦路耕之介(筆名)が、『ある特務機関の話』(博文館発行)として書いた。これを劇作家竹田敏彦が脚色し、『満州秘話』と題して、昭和七年五月、新国劇一座により、京都南座で上演され、続いて秋、東京及び大阪でも上演された(この書籍は、国立国会図書館デジタルアーカイブから読む事が出来る)。天風役は、島田正吾が演じた。

日露戦争は、勝利のうちに幕を閉じたが、三郎は、しきりに咳をするようになり、ついに血を吐いた。奔馬性結核と診断された。症状が派手で、馬が疾走するように速く病状が進行し、死に至るといふ、悪性の肺結核であった。当時の肺結核は死病ともいわれ、的確な治療法はなかった(治療薬は、昭和20年代になり出来た)。

そこで、三郎は真理を求めて、アメリカへ渡るのである。病を持っていた為、密航で渡った。病床で読み感動した本の著者をアメリカで訪ねたが、的確な返事は、得られなかった。一つだけ良かったことは、香港の華僑の息子の身代わりにコロンビア大学に通い、医学を学ぶことが出来たことであった。医学を学んだが、三郎の結核は治らなかった。だが、華僑から、身代わり受講に、多額の謝礼をもらったことは、三郎の希望を続けさせた。

アメリカをあとにした、三郎は、イギリス、フランスへと渡った。フランスでは、知人の紹介で大女優のサラ・ベルナールを訪れた。三郎は、この人の美しさと粋な喋り方に魅せられてしまった。しばらく、このサラ邸で厄介になることになった。サラ邸には、オペラ女優が花のように集い、笑いざわめいていた。しかし、結局、フランスでも望む答えは得られなかった。

失意のどん底に落ちた時、心をよぎるのは、母の顔であった。三郎は無性に母に会いかった。日本に帰ろうと決めた。サラ・ベルナールの引き止めるのを振り切って、三郎は、マルセイユの港を後にした。

カイロに着いた翌日、フィリピン人の缶焚き人夫からピラミッド見物を誘われた朝、三郎は、大嗜血した。船旅の疲労が重なったことであろう。三郎は、めまいがひどく立つこともできなかった。三郎は、ベッドで横たわっていた。三時を過ぎた頃、ホテルのボーイが「何か食べなければ」と親切に誘ってくれた。三郎は、ふらつく体をひきずるようにして食堂に足を運んだ。注文した、スープもサラダも砂を噛むように味気なかった。

テーブルを五つ、六つ隔てた向こうに六十がらみの、色の浅黒い人物がいるのが映った。後ろに立つ従者が、大きな羽根の団扇で風を送っている。すぐさま、「こちらにおいで」とその人は、ロンドン訛りで言った。「承知致しました」と返事し、引き寄せられるように、三郎はその人の前に立った。

その人は、じっと三郎を見つめていた。「お前は右の胸に、大きな疾患がある。お前は、祖国へ墓穴を掘りに行こうとしている。お前は、死ぬ必要はない。お前は助かる。私について来なさい」その人は、厳かに言った。思わず三郎は、「承知致しました」といってしまった。

翌朝、いわれた通りにホテルの裏に行ってみると、ナイルの河に三本マストの白い船が浮かんでいた。三郎は、勇んで階段を上って行った。そこにその人は立っていた。そして、言った。「お前は救われた」と。「あなたは、どなた様ですか、私をどこへ連れていくのですか。どのようにして私を救ってくれるのですか」三郎は、一言も訊こうとはしなかった。

それから、三ヶ月の後、三郎を連れた一行は、ヒマラヤの第三の高峰、カンチェンジュンガの麓のゴーク村に到着したのである（移動は船、ラクダ、最後は徒歩）。この村こそ、古い歴史を誇るヨガの修行の根拠地であった。

三郎がカイロで出会った不思議な人物はヨガの聖者カリアツパ師であった。イギリスの国王に会った帰りにエジプト、カイロで三郎はめぐりあったのである。この出会いは、世紀のめぐりあい。このめぐりあいを契機として、結核の一青年が救われただけではない。三郎は、後に天風となり、多くの人々を救うのである（天風という名は、頭山満が名付けた）。

ヨガとは、俗語で結びつけるという意味である。ヨガの修行では、統御を意味する。ヨガは八つの階梯をもって修行をすすめてゆく。倫理的な戒律の行。様々のポーズをとる肉体的な行。呼吸を強め、整える呼吸の行。感覚を統御する行。精神を集中する行。集中し尽くす行。そして無念無想の行がある。

三郎は、生理学や心理学の素養があったから、行のもつ意味や効果を納得の上で修行ができた。他のヨギ（ヨガの修行をする者達）よりも早く三郎は、ヨガの核心に触れることができた。轟々と耳を聳する程の音を立てて落ちる滝壺で、坐り続けた三郎の耳は、鳥の声や地虫の声を聴く程に集中しきった。激しい修行の中で、三郎の魂の夜明けは近かった。

ついに三郎は、大地を叩き、大感動の中で、聖なる体験に到達した。聖なる体験の中で、「わが生命は、大宇宙の生命と通じている」と直感。生命は、力と智恵を行使して、絶妙な創造活動をする。そして、生物は、進化し人間は向上するものであると三郎の眼に宇宙の様相が明確に見えてきた。

この聖なる体験を契機として、肺患の青年三郎は、哲人天風に飛躍するのである。三郎を悩まし続けていた結核は、いつしかその活動を休め、レントゲンの上に痕跡を留めるだけになった。

天風は、すさまじい程の迫力で多くの人々を救い、導いた。財界、政界、官界、法曹界はもとより、芸術家、芸能人、スポーツマンなど、多くの人々が入門し、薫陶を受けた。天風は、人々を教化すること五十年。九十二歳でその劇的な生涯を閉じた。人間に信念を与える天風哲学は、心身統一法が一体化して成立したのは、大正八年のことである。

主な中村天風門下生

原敬（元首相）

東郷平八郎（元帥）

山本五十六（元帥）

浅野総一郎（浅野セメント創業者）

双葉山定次（元日本相撲協会理事長・横綱）

7代目松本幸四郎（歌舞伎役者）

6代目三遊亭円生（落語家）

大佛次郎（作家）

園田直（元厚生相・外相）

宇野千代（作家）

植芝吉祥丸（合気道会会長）

藤平光一（心身統一合氣道創始者）

松下幸之助（松下電器産業創業者）

尾身幸次（元財務相）

広岡達郎（野球評論家）

他多数

天風先生座談

宇野千代

一見書房

人間として大切なもの 推薦 松下幸之助

誰しも幸せを求めながら、それが得られないのが人間の現実の姿。これはいったいどういうことであろうか。天風先生は波瀾万丈のその体験を通じて、生きるか死ぬかというギリギ

人間として大切なもの 推薦 松下幸之助

誰しも倖せを求めながら、それが得られないのが人間の現実の姿。これはいったいどういうことであろうか。天風先生は波瀾万丈のその体験を通じて、生きるか死ぬかというギリギリのところ、その一つの答えを身をもって悟られた方だと思ふ。その説かれるところきわめて明快。しかもまことに面白く、思わずひきこまれて読みすすむうちに、知らず知らずに人間として大切なものを教えられる思いがする。

宇野千代著 「天風先生座談」 二見書房

書籍帯 推薦文 松下幸之助

人間として大切なもの

誰しも倖せを求めながら、それが得られないのが、人間の現実の姿。これは、いったいどういうことであろうか。天風先生は波乱万丈のその体験を通じて、生きるか死ぬかというギリギリのところ、その一つの答えを身をもって悟られた方だと思う。その説かれるところきわめて明快。しかもまことに面白く、思わずひきこまれて読みすすむうちに、知らず知らずに人間として大切なものを教えられる思いがする。

甦りの誦句

我は今、力と勇気と信念とをもって甦り、新しき元気をもって、正しい人間としての本領の発揮と、その本分の実践に向かわんとするのである。

我はまた、我が日々の仕事に、溢るる熱誠をもって赴く。

我はまた、欣びと感謝に満たされて進み行かん。

一切の希望、一切の目的は、厳粛に正しいものをもって標準として定めよう。

そして、恒に明るく朗らかに統一道を実践し、ひたむきに、人の世のために役だつ自己を完成することに、努力しよう。

力の誦句

私は、力だ。

力の結晶だ。

何ものにも打ち克つ力の結晶だ。

だから何ものにも負けないのだ。

病にも、運命にも、

否、あらゆるすべてのものに打ち克つ力だ。

そうだ！

強い、強い、力の結晶だ。

参考文献

中村天風著 「運命を拓く」 講談社

松本光正著 「新説 中村天風の歴史」 河出書房新社

南方哲也編著 「天風入門」 講談社

生き方発見シリーズ 「中村天風のすべて」 サンマーク出版